

備後国「三谿寺」(≡寺町廃寺跡)の歴史的位置

広島大学名誉教授

西別府 元日

はじめに

報告書第7章第6節『「寺町廃寺」と「三谿寺」—文献史学の視点から—』

1	はじめに
2	『寺町廃寺』への層位学的プロローグ
3	『寺町廃寺』の周辺—古代三谷郡の特質と地域社会
4	「三谷寺」の建立と「神祇」
(1)	「三谷寺」の創建時期
(2)	三谷郡大領祖の誓願—「神」「仏」の邂逅
(3)	神祇と仏教—渾然から分立へ
(4)	百済僧弘済の信仰と行動
5	「三谷寺」と寺町廃寺、その「統合」のために
6	結びにかえて

※三次市「寺町廃寺」一帯の宗教的特質を追究する必要性

※「寺町」という地名

建保6年(1268年)の「寺町 御山方供給米徴下事」という書きだしの高野山文書が存在することを確認(『鎌倉遺文』2352号文書)

1. 三谿郡大領祖の誓願「爲諸神祇造立伽藍」の意味を考える 神祇(神祇信仰における崇拝の対象)と仏(仏教における崇拝の対象)の並立

『日本書紀』における「天神地祇」「神祇」概念の形成 ⇒cf 別紙年表

6世紀中頃以前と7世紀終盤

天神 王権の由来や淵源ないしはその王権の内実に対応

神祇 天神とは異なる「神々」で幣帛を受ける

地祇 自然界の運行を司る存在=慰撫・敬拝・幣帛の対象(地祇)

※7世紀終盤の思念を、『日本書紀』編纂の際に6世紀以前に適用



6 世紀後半～7 世紀第Ⅲ四半期（550～675 年頃）

仏教伝来を契機とした神々の体系や「社」の形成＝仏教への対抗

「神」（⇨仏・法・僧侶）や「神の社」（⇨仏教寺院）の意識

「神の宮を修し神霊を祭れば国栄えん」555 年の蘇我氏一族の言

「神」「仏」を超える「天神」理念の形成（＝天皇権威の確立）



その転換の過程を反映した史料（『日本書紀』皇極天皇元年（642）紀）

六月乙酉の朔庚子、微雨。是の月に、大きに旱る。秋七月甲寅朔壬戌（九日）に、客星、月に入れり。（中略）戊寅（二十五日）、群臣相い語りて曰く、「村々の祝部の所教に随い或いは牛馬を殺し諸社の神を祭り、或いは頻りに市をし、或いは河伯を禱る。既に效するところ無し。蘇我大臣報へて曰く、寺々に於いて大乘の經典を轉讀しすべし。

悔過すること佛の説く所の如くして、敬て雨を祈らんと。庚辰（二十七日）、大寺の南庭に於て、佛菩薩像と四天王像を嚴にして、衆僧を屈請して、大雲經等を讀ましむ、時に、蘇我大臣、手ずから香爐を執り、焼香して發願す。辛巳（二十八日）、微雨。壬午（二十九日）、雨を祈ること能わず。故に讀經を停む。八月甲申朔、天皇、南淵の河上に幸し、四方に跪拝して、天を仰ぎて祈りたまう。即ち雷なりて大いに雨ふり、遂に雨ふること五日、漙ねく天下を潤おし是に於いて、天下の百姓、俱に萬歳を稱して曰く、至徳（いきおい）まします天皇なりと。

（『日本書紀』卷 24、皇極天皇元年 6 月～8 月条）

※「神祇」と「客神」（仏教の仏・法・僧）の役割が未分化＝671 年頃
地方豪族は「神々」や「客神」を含めて「神祇」と認識していた？



☆「三谷郡大領祖」の誓願（「諸神祇のために伽藍を造立せん」）の意図

- ・自らの地位の淵源である先祖の「供養」
- ・王権周辺に芽生えた王権の天神への従属
- ・統轄する地域の平穏な自然や気象の安定等の祈願

2. 『日本霊異記』からみた弘済の来日時期と三谿寺創建

① 百済滅亡以前の渡来僧の活躍

派遣軍が渡海する以前の斉明天皇治世期に百済僧侶の来日はいりえた。

釈義覚は、本百済の人なり。其の国の破るる時に、後岡本宮に宇御めたまひし天皇（斉明天皇）の代に当りて、我が聖朝に入りて難破の百済寺に住む。法師の身の長七尺、広く仏の教を学びて心波若経を念誦む。

『日本霊異記』上巻 14 僧心経を憶持ちて現報を得奇しき事を示す縁

② 弘済の来日時期

（百済滅亡以後？、報告書では 663 年倭軍・百済遺臣らの撤収～671 年頃と想定）⇒cf 別紙年表

朝鮮半島での旧百済軍の復興運動に決着がつき、その多くが日本へ亡命した時期から、唐が高句麗との戦争に勝利し対新羅戦争を本格的に想定・開始する時期

※百済遺臣や百済救援部隊が旧百済の版図から一掃されていること。その指標は、天智天皇 10 年（671 年）10 月から 11 月の新羅使者の来朝（この時期以前に高句麗遺民を援助し、旧百済の熊津都督府を併合）や郭務宗の 3 度目に来日以前になるのではないか。

※「三谷寺」の創建

⇒天武天皇即位前後には創建着手か？

白鳳期の寺院であることは確実

⇕

伊予国越智郡司祖の寺院建立

③ 伊予国越智郡司祖先の寺院建立

伊予国越智郡の大領の先祖越智直、当に百済を救はむが為に軍に遣到さるる時に、唐の兵に擒はれ、其の唐の国に至る。我が国の八人同じく一の洲に住む。儻観音菩薩の像を得て信敬ひ尊重ぶ。八人心を同じくして、竊に松の木を截りて以ちて一の舟とし、其の像を請へ奉りて舟の上に安置き、おのおの誓願を立てて彼の観音を念ふ。爰に西風に

随ひ、直に筑紫に来る。朝庭聞きたまひて召して事の状を聞きたまふ、天皇急に矜みたまひ、樂ふ所を申さしめたまふ。是に越智直言さく「郡を立てて仕へむ」とまうす。天皇許可したまふ。然うして後に郡を建て寺を造り、すなはち其の像を置く。時より今の世に迄るまで子孫相續ぎ歸り敬ふ。けだし是れ觀音の力にして信ふ心の至なり。丁蘭の木之母すらなほし生ける相を現し、僧の感りて画ける女すらなほし哀ぶる形を応ふ。何にいはむや、是れ菩薩にして応へざらむや、これ菩薩にして応へざらんや。

（『日本靈異記』上卷 17

兵の災に遭ひ觀音菩薩の像を信敬ひて現報を得る縁）

※伊予国越智郡司祖先らの帰国？ 唐への抑留期間？ 帰国時期は不明

※「天皇の矜み」「天皇許可」は天智か天武か？

※天武 14 年「諸国に詔す。家毎に、佛舎を造りて、乃ち佛像及び經を置きて、礼拝供養せよ。」という命令との関係？（天武 14 年：685 年）

☆越智直氏の郡支配権の確立と寺院の創建は

天武朝後半ないしは持統朝

おわりに

「三谷寺」白鳳期前半（670 年代）には、創建に着手された可能性が高い。
地方寺院のなかでは早期の創建か？